

魔法世界の受付嬢になりたいです

5



ロックマン

(アルウェス・ハーデス・アーノルド・ロックマン)
ナナリーの魔法学校時代からの
ライバルで恋の相手。
王国騎士団第一小隊の隊長兼、
宮廷魔術師の魔術師長。

ララ

ナナリーの使い魔。
ブラン・リュコスの女の子。
体の大きさを自在に変化できる。

ナナリー

(ナナリー・ベルセボネ・ヘル)

夢だった「受付のお姉さん」と
して、魔導所で日々奮闘中。
恋人同士ではないが、ロックマン
への恋を自覚したばかりの恋愛
初心者。



コック

(コック・シオル・ウェスタス)

ウェスタス王国第一王子。

後天の瞳、別名魅了の瞳と称される能力を持つ。ナナリーに興味を持っているようで……。

ゼノン

(ゼノン・バル・セウス・ドーラン)

ドーラン王国の第三王子で魔法学校でのナナリーの同級生。王国騎士団の副団長。国民からの人気が高い。

ベンジャミン

(ベンジャミン・メタ・リリス・フェルディーナ)

おしゃれなナナリーの親友。

恋人のサタナースと一緒に破魔士として活躍中。

ニケ

(ニケ・ヘーラ・フルネル)

女子力の高いナナリーの親友。王国騎士団に所属しており、ゼノンの側近的な役割を担っている。

登場人物紹介

魔法世界の受付嬢になりたいです

5



Contents

物語・XI	006
物語・XII	063
物語・XIII	075
物語・XIV	095
物語・XV	125
物語・XVI	154
アルウエスの難題	164
物語・XVII	178
物語・XVIII	201
メイド長は思う	224
物語・XIX	228
物語・XX	289
番外編 二人で行こう ※書き下ろし	301
番外編 ある従者視点 ※書き下ろし	309



物語・XI

ここはどこ私は誰。

なんていうベタな言葉なんていつ言うときがあるんだ使いだころないだろとか小説を読んで思ったことがある。

ここはどこ私は誰。

まさに今が使いどきかもしれない。

青い空に青い海、そんな景色なんてなんのその。

視界に広がるのは美しく豪華に彩られたどこかのパーティー会場に、一生分働いても手にできるかどうか分からない宝石をちりば鑲めたドレス、衣装に身を包んだ紳士淑女多数。

「ここって……」

海水に濡れた髪がダランと頬に垂れ下がり、邪魔になって片耳にかける。ポタポタとしずく雫が床の板に染みていた。

揺れを感じるし私も馬鹿じゃないのでここが船の上だということは分かる。

もつと言ってしまったばこれが何の集まり、パーティーなのか、視線の先にいるアルウエス・ロツクマンとゼノン王子を見てうつすらなんとなく分かった。

不寐ふしつけながらも私が王子に断りの手紙を送ったアレ。

ミスリナ王女もいて、何より純白のドレスを纏^{まと}ったシーラの第四王女もいらつしやるということ
は（シーラの王女は昔仮面舞踏会で見たことがあるから顔は分かる）。

おそろく結婚式関連の集まりだ。

まさかここで結婚式を……？ 船上式？

『——んいやあつ、ロックマン！』

さつきロックマン見て叫んじやったんですけど。

でも確か王国で盛大な式を挙げている予定だったような。もしかこれは二次会みたいなやつか。
あの楽しいやつだ。

「あ、あの、お嬢さ……」

それはさておき、こんな恐れ多い場所で我ながら今とんだ失態を……。私を助けてくれたらしい
白い服を着た男の人が、隣でドン引いた表情でいるのを見て我に返った。いやそんな顔しなくても。
でもちよつと待て、王族がいる船上パーティーにずぶ濡れの平民女が紛れているこの非常識な事
態、みんな手にグラスを持つて優雅に楽しんでいたところに何ていう迷惑をかけてしまったのか。

今すぐにでも船から飛び降りてしまいたい気持ちになるが、それはそれで助けてくれたお礼もし
ない無礼者になりかねない。

「ありがとうございます」

私は真正面から恥を受け入れ、助けてくれた男の人の大丈夫ですかの声に大丈夫だと大人しく応
える。

背中を支えてくれており、次いでやんわりと手をすくわれ、指先を握って冷えていないか確認してくれていた。

扇子で口元を隠してこちらを凝視してくる目力の強い女性たちの視線が、珍獣を見るかのように四方から突き刺さる。ジクジクと地味に痛い。何か事を成して大勢に囲まれ崇められるのは悪くないが、大勢に囲まれて奇異の目で見られるのはすこぶる嫌だ。

濡れた肌が海風に当たって少し震える。

さてここからどうすれば。

「大丈夫？」

奇声を発するハメになった元凶であるロックマンが近づいてきて、私を見下ろす。青い生地に金色の刺繍が施された衣装が眩しく目に映る。

先ほどは手紙でのやりとりがほとんどだったこともあり、思いがけない場所で本人を目の前にしたのでついあんな声を上げてしまった。きっと叫ばれた本人が一番恥ずかしかったに違いない。それはそれでいい気味だと、いまだ消えないロックマンへの対抗意識及び私の性格の悪い部分が高笑いをする。

「なんでこんなところに？」

「いや、えっと」

ため息をつき、なぜお前がここにいるのだとあきれを含んだ視線を寄越された。

何か月ぶりかに見た奴の髪のはやっぱりまた伸びていて毛根すごいなと感心しつつ、確かにな

んでこんなことになったのかと記憶をさかのぼる。

出張は想定していた通りで、鱗うろこの採取許可を得るために大臣宛てに書類を送ったのち、いいよーという返事が来るまでに一か月、外官がいこう（外調鑑識官がいちょうかんしきかん）で荷物が引つかからないように、国内に持ち込んだものを門で没収されないようにするための手続きも必要になるので、外官宛てにまた別の書類づくり（害はない〜とか生態系に影響ない〜とか無許可の物じゃないです〜とか色々書く）。最終的に国王の捺印なっしんをもらって計二か月。やはり時期も被るので王子の誘いを断っておいで正解である。

そうして昨日やっと出張先のセレイナへ後輩であるヤヌスと来ることができた。

『先にセレイナの外官に行く？ 一番近いよね』

『ですね。でもこの街並さつきも見たような……ひょっとして俺たちぐるぐる回ってません？』
という会話を繰り返しながらも、土地勘のない私たちはセレイナの地図を見ながら駆け回り、辿り着くまでが長かったがこの国での仕事は一日足らずで終わった。クタクタで倒れそうになっていたヤヌスは借りていた宿の部屋の前で白目を剥むいていた。無理をさせ過ぎて申し訳なかった。

翌日の今日はセレイナの魔導所へ挨拶に行くだけだったので観光がてらヤヌスと二人で王国内をぶらぶらしていた。そして街観光に飽きたらしいヤヌスが海を見たいと言うので海岸へ近づいていくと、港にいた褐色肌の元氣なおじさんが五重の虹が見られるところがあるから船に乗らないか、と声を掛けてきたのである。

五重の虹とは名前の通り虹が五重になっている現象のことで、セレイナの観光誌にもたびたび掲

載されている。それが観光的にセレイナの売りな部分でもあるのだ。

『行きます？』

『行く？』

『行きましょう！』

『そうしよう！』

というわけでまあまあ悩んだけど仕事が終わって浮かっていたのもあって私とヤヌスは満場一致でノコノコ付いていきお金を払って小舟に乗った。

でも浮かれていただけじゃなくて、私は純粹に気になっていたことがあった。母と父は今どうしているのか。

海に出ただけじゃどうなっているのかなんて分からないけど、なんとなくおじさんの言葉に惹かれてしまったのはそんな気持ちに常にあつたからなのかもしれない。

まさかその小舟に乗るのは自分たちだけでおじさんは乗らなくて私たち舟の素人二人だけで海の上をさまよい、あげくそこに大型の船が突っ込んでくるなんて想像もしなかったのだけれど。

というかこれ、ある意味ぼったくりじゃん。私の大切な金返せ。

前回セレイナへ来たときも散々な目に遭ったし、私と海は大分相性が悪いのかもしれない。

「海の水は簡単には乾かないから。風邪引くよ」

ぐるぐる思い返しているとロックマンが目の前にしゃがみこむ。

ペタリと両膝を床につけて間拔けな表情でいた私はハッと、出張のことを考えている場合じゃ

ないと現状を把握するため今度はしっかりと辺りを見回した。

私の横にいた男の人はいつの間にかいなくなっていて、見れば引き上げられたもう一人の遭難者、ヤヌスのところへ駆け寄っていた。ケホケホ咳き込んでいるのが聞こえ、意識もあるのか男の人は私としていたやりとりをヤヌスにもしており、彼も無事なことが分かる。

ホッとできる状況じゃないがとりあえず胸を撫で下ろしている、肩にぬくもりを感じる。ふいに視線をそちらへやると、風邪引くから、と上着をロックマンが私の肩にかけていた。

「んな、」

ななななななななになになに。

また奇声を上げるわけにもいかなないので口を開けるだけにとどめる。すごい顔をしているのは自分でも分かっている。

そんなさなか、ロックマンの後ろに白髪の若い男性が来て立ち止まる。その人は私を見るとニコリと人の好き^よそうな顔で笑いかけてきた。

誰だ、この人。

「こちらのもっと暖かいものをかけるといい。そのような服では寒いだろう。アルウェスは気が利^きかないな」

ふわふわした毛布、確かに暖かそうだ。高貴な雰囲気というか、実際こんな場所にいるのだから高貴な人なのだろう。平民のずぶ濡れ迷惑女になんて優しいんだ。

気が利かないは余計だと思うが、他人の優しさに目が潤み横目でロックマンを見た。

涼しい顔で舌打ちをしていた。

暖かそうな毛布を目の前にしてありがたく手を伸ばそうとした私は、見た目は慎ましくも爽やかに態度悪いことこの上ない男をまじまじと見つめた。

いったい舌打ちされたのは私なのかそれとも白髪 of 男性になのかそれとも歯に付いた食べかすでも取っていたのか、とか失礼なことを考えていると、男性が口元に手を当ててハハハと笑いだす。今のどこに笑う要素が。

「冗談だよ怒らないでくれ。ほら、ひとまず彼女を休ませないと」

女性をダンスにでも誘うような手つきで、毛布を抱えていないほうの手を差し出される。こちらへ来るといいという男性の言葉に、確かにいつまでも地べたに座っているわけにはいかないか、邪魔だし。と思って立とうとしたら後ろから両肩をグッと押さえつけられて動けなくなった。

え、と肩越しに振り返ると、やや迷惑げな表情の男とばかり目が合う。

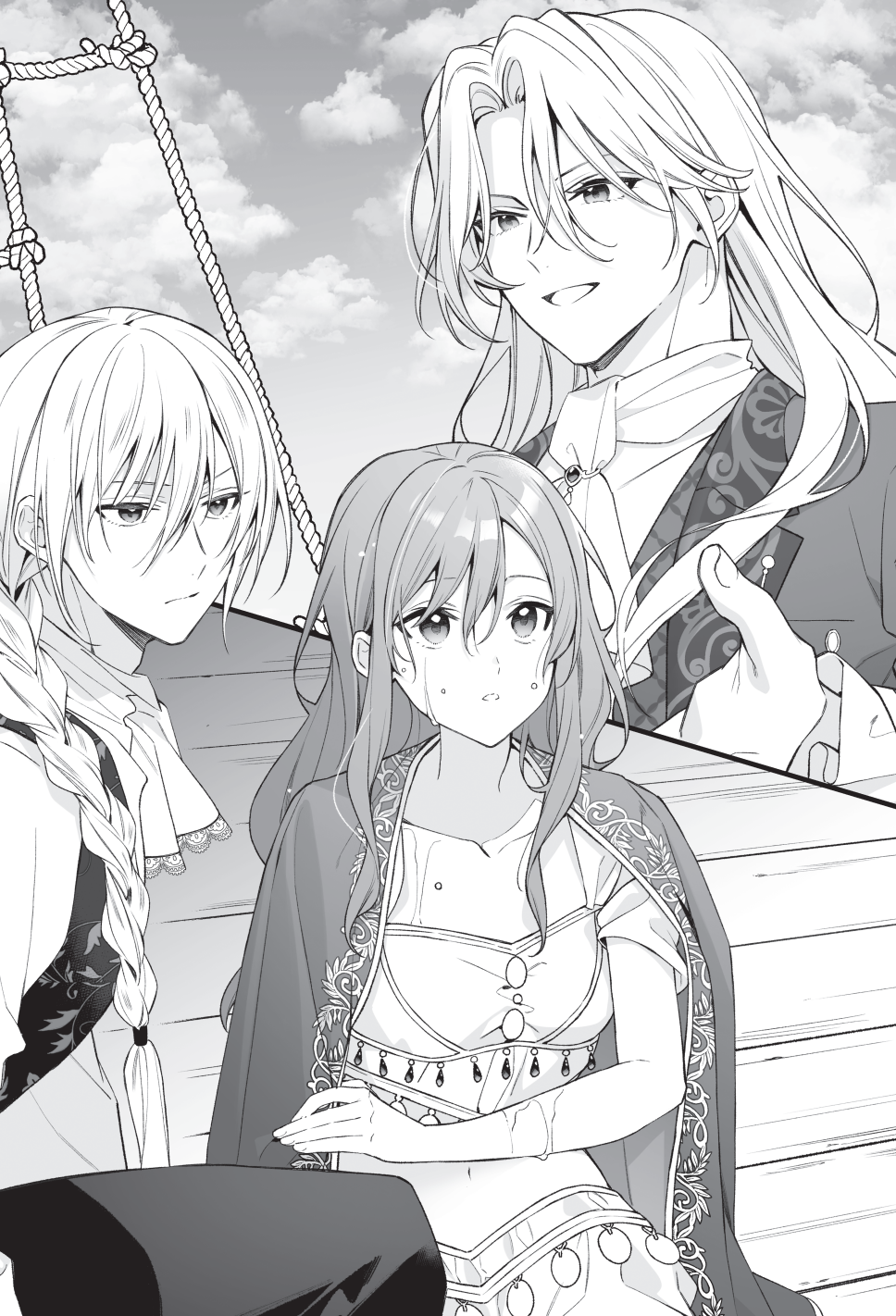
赤い瞳をこんなに近くで見たのはいつぶりか。

肩に置かれた手とロックマンを交互に見る。

緩く結われた長い髪 of あいだから、緋色の小さな耳飾りがチラリと光って見えた。

「彼女はドーラン王国の民ですからこちらで世話します」

片膝をついていたロックマンはやれやれといった仕草をしながらゆっくり立ち上がると、まだまだ乾きそうにない私の濡れた頭に厚手の手拭い^{てぬぐ}を被せた。どうやらこれで頭を拭けということらしい。



ついでに肩にかけられていた青い上着も袖を通せとばかりに広げて差し出されたので、海風に身震いしていた私は抵抗することなく素直に腕を通した。

やけに甲斐甲斐しいな。なるほど世話するってこういうことか。

ぶかぶかの袖をパタパタさせると、ふんわりいい匂いがした。

「ドーランの？ 知り合いかい？」

驚いた表情で私を見る。

「へえ、広い海の上でよくそんな偶然があるものだ」

「ええ」

「だが、そういえば……貴女をどこかで見た覚えが」

男性は腰を屈めると、首を傾げて私の顔を覗き込んできた。青い瞳が湿っぽく輝いて、私を食い入るように見つめる。

濡れて束になった前髪が額に張り付いて、雫が頬をつたった。

「貴女のような美しい女人と会ったら忘れるはずがないのに」

後ろ手を組んで無邪気な視線を向けられる。太陽に照らされた白銀の髪は涼しげに揺れていた。距離の近さに驚いた私は首をヒクリと引っ込める。

ん……？ あれ、なんだろうこの感じ。

この人のことを見たことはないはずなのに既視感が。

『待つて。水色髪のお嬢さん、今夜お食事でもどうでしょう』

『私ですか？』

競技場でボリズリーさんに話し掛けられたときのことを思い出す。

この人の言葉の訛りからしてドーランの貴族でないことは確かだ。どちらかといえばヴェスタヌのデグネア王女やボリズリーさんの訛りに近い気がする。

「そうだ新聞の記事で似たような……」

男性はその綺麗な顎に人差し指をそわせて視線を上にした。

「記事とは」

「ああ！ 確かシユテーダルを倒したというドーランの女性か」

思い出せてスッキリした顔をする男性とは反対に、私の顎にはもれなく皺が寄る。たぶんげっ歯類が威嚇したときみたいな顔になってる。

くそ、また記事か。人がまあまあ長く眠っていたのをいいことにあいつら個人情報までドバドバと晒しやがって。この人がどのどんな記事を読んだのか知らないが、一回ドーランの新聞を読んだことがあるけど、私の実家の場所まで書かれていたうえに『この都会から程遠い存在すら怪しい辺鄙な村に生まれた彼女は』とか書かれていて失礼千万だった。自分で自分の故郷を辺鄙な村と言う分には良いが、第三者どころか第十者かつてくらいまったく知らない赤の他人に辺鄙とかコケにされていた。不愉快極まりない。しかも今まで恋人はいたことがないという恥ずかしい情報を書けられた挙げ句『一人もいたことがないのは見た目に反して性格に難あり？』とか余計な一言が添えられていた。

当然その新聞はくしゃくしゃにしてゴミ箱にぶち込んだ。

いつか偉くなったたらあの新聞社を潰^{つぶ}してやる。

それより、あの毛布もらつていいのかな。良いんだよね。話をしつつも男性がさつきからずっと差し出してくれていたそれを、よーしと思って掴^{つか}もうとする。

しかしスカツと空気を裂いて掴み損ねる。

「だーめ」

というよりは物理的に離されたと言うべきなのか、私はロックマンにガツシリと首根っこを掴まれてズルズルと船の中央へと連れられていく。

ここの床板は良い木材を使っているのか、服が引っ掛かることなくスルスル移動できて滑りがいい。……んなことどうでもいい。

「えええちよつとなにすんのよ……!」

毛布と白髪の男性の輝かしい笑顔が遠退^{とほ}いていく。空は青い。

一応救助された遭難者なのに、まるで罪人のような扱いだ。

魔法で手を弾こうとしたらそれを察したロックマンに、ここで危ない魔法は使っちゃ駄目と言われたので、魔法？ 筋力高めるやつも？ と聞けばもちろん駄目と返される。駄目駄目ばっかである。

何か縛りがあるのだろうか、せめてもと私はロックマンの手の甲をつねるものの、これまたお上品にペシリと手を叩^{たた}き落とされた。

引きずられる私が目に入ったのか、最初に私の意識を確認してくれていた男の人が慌てた様子でヤヌスのところから駆け寄ってきて「お知り合いですか？」とロックマンと私を交互に見た。ええそうですと歩みを止めることなくロックマンが応えると「分かりました」と男の人は納得してヤヌスのほうへ戻る。何が分かったというのか。

自意識過剰と言われるだろうが、またもや周囲の人間の視線が突き刺さり居たたまれなくなる。

そりゃそうだ、船の上で引きずられる女なんてそうそう見ないだろう。目が覚めたときよりはいくらか視線の鋭さは和らいでいたものの、特に先ほどチラッと見かけたデグネア王女は目を陰しく吊り上げて私を睨^{にら}んでいた。基本お化け虫以外怖いものはない私だが、その視線にはビクツと肩が跳ねた。

パーティーの邪魔をして本当にすみません。

大きな白い帆^ほが張られている中央付近にはゼノン王子とミスリナ王女、ベラ王女がいて、先ほど同様目が合う。抵抗^{むな}虚しく三人の前に連れてこられた私は、視線を逸らしながら誰に何を言われたわけでもなくおずおずと正座の体勢になった。もちろんこの場にいるのはその三人だけではなく、お年を召した紳士や若い淑女やらがたくさんいたが、そこは割愛^{かつあい}する。

なにしてみんだとロックマンに突っ込まれるが、この面子^{めんつ}の前で突っ立っているほうがおかしいだろう。

これだから貴族のボンボンはかくかくしかじか。

「大丈夫か？」

「貴女を見たのは式典以来だけれど、こんなところで何をなさっていたの？ コックに変なことさ
れてません？」

頭こうべを垂たれる私に向かつて、ゼノン王子とミスリナ王女が声を掛けてくださる。

コックって誰。

「仕事の延長で観光を……たいへんご迷惑をおかけしてお恥ずかしい限りです」
目を閉じて心の中で涙を流す。

私ここ最近恥しか晒していない気がする。

「さっき船長に確認したが、あれはこの船の不注意らしい。少し進路を外れていたうえに、ここから岸までの距離が旅船にしては近すぎたそうだ」

こちらが本来なら入ってはいけない領域にいたのだから、謝ることはないとゼノン王子に言われる。

「今日はそんなに改まった場ではないから気に病まずともよくてよ。カーロラも驚いていたけれど遭難者が無事で良かったと安堵あんどしていたわ」

セレイナの正装であらう赤い民族衣裳に身を包んだベラ王女が、次いで声を掛けてくださった。彼女を見るのは競技場へマイティア王子と来てくれたとき以来で、相手は私のことなど覚えていないだろうが、あの瞬間すごくホッとしたのを覚えている。

「さあさあ、お立ちになって。身体からだがすごく冷たい……治療をかけたなら少し休まれるといいわ。

シーラのほうにはセレイナのベラの部屋で休むと言っておきましょう」

「ありがとう、それなら身元の説明は僕がしておくよ」

「王女様のお部屋に？ ちょっとロックマン!？」

とんとん拍子で物事が進んでいく。

やはりやけに甲斐甲斐し過ぎないか。

王女が私の背中をさすりながら体を起こしてくれた。待つてく下さい親切にし過ぎですから直ぐす帰りますからと言つても、聞こえているのかいないのかそれに対しての返答はなかった。王侯貴族というものは、みんな強引なのか。

手をぐいと引かれて戸惑いつつ中腰になりかけたとき、ベラ王女が耳元で囁ささやいた。

「ちようどよかったわ。貴女に伝えなくてはならないことがあるの」

その言葉に反応して振り返ったとき、治癒の光が視界に広がった。

私の意識はそこで途切れた。



目が覚めると寝台の上だった。こんな状況は何度目か。

慌ててむくりと起き上がる。

部屋は暗く、レースのカーテンから薄い夜の光が漏れていた。

ここは誰のどこの部屋なのか。私が起きた場所は学校の寮の三人部屋よりもっともっと、二倍ど

ころではない広さの部屋だった。

しかもこの寝台、私が昔憧れていた天蓋付き。

かわいいフリフリのレースで覆われているそれは、私のちっぽけな乙女心をくすぐる。窓際にはテーブルと椅子があり、その向こうには海が見える。

確かベラ王女に手を引かれて、伝えたいことがあると言われたところで眠ってしまったような。怒涛どとうの一日で仕事を終わらせたうえ海に落ちたこともあってか、自分で思っていたよりも大分疲れていたらしい。

滑らかなシーツをはがして床に足をつける。

窓の外を見る限り、陸へ返されたのではなく船の中の部屋で休ませてもらっていたようだ。

そういえばと、ベラ王女が自分の部屋で休め的なことを言っていたのを思い出す。

まさか、こもしかして王女の部屋……？

かわいい寝台からバババツと素早く離れた。私が寝ていいところではない。

なるほど王女様の部屋なら納得の広さとかわいらしさである。

王女様から私のような他国の平民ごとにお話したいことがあるということだったので（話ってなんだろう地下牢にぶち込まれるのか）、行き違いになるのも迷惑かと思いいまここですて待ってしようとしたが、ふと部屋の扉が目に入った。

途端やヌスのことが頭に浮かび、心配で落ち着かなくなる。

足先をトントン鳴らして、拳こぶしを口に当てる。

私は貴族がたくさんいる場に慣れているから良いものの、彼はそうではないかもしれないし、海の上でしかも外国の船の中、おそらく不安を感じているだろう。

旅船の内部だし、ほんの少し探すくらいなら良いだろうか。十分ほどで戻るなら。

意を決してドアノブに手をかける。

扉を静かに開けると、夜とは思えない暖かな光が射し込んだ。

部屋からそっと顔を出せば、なるほどこれがこの船上パーティーの本番だったのか、視線の先では色とりどりのドレスが蝶々の羽根のように広がっては縮まり、男女が向かい合ってくるくると回り踊っていた。音楽が鳴り響く。

すると開けた扉がグニャツと形を変えて、小さな丸い板になった。身長以上の高さがあった入口は縮んで、幅が狭くなる。急に上半身しか出せなくなったが、これだとまるで小窓から顔を出しているみたいだ。首を伸ばしてもっと外を見てみようかと確認すれば、人が一人入れるくらいの大きさの樽が左右にいくつも横倒しで並んでいる。転がらないようになるのか、全ての樽は縄で縛られてまとめられていた。

私がいた場所は船の中央端の樽置き場だった。

そしてどうやら、自分が寝ていたここは樽部屋らしい。

「樽」から身乗り出して、すぐに端へ寄る。初めて入ったけどあんなに広いのならもうみんな樽の中で暮らしたほうが良くないかと真面目に思った。

セレイナの民族衣装は綺麗だけれどパーティー向けではないので、不相应な格好をしている私は

精一杯隅にへばりついた。

足音が聞こえないように背を丸めて器用にササッと歩く。

さながら泥棒である。

船の帆の上に浮いた大小三つのシャンデリアは、夜空にある月の光を受けて不思議な輝きを放っていた。

チカチカ瞬またたいている。

歩きながら思わず一瞬ボーンと見とれた。

「海王うみおうにお会いできるのが楽しみですな」

「恥ずかしながらわたくし、物語の中だけの存在だと思っておりましたの。帰国したら母にお話ししてさしあげないと」

「船には画家も呼んでいるので、明日の光景を絵に残しておくのもよいかもしれませんぞ」

昼間にはなかった活気が漂っている。

身動きができないほどの人だかりとはいかないまでも、傍はたでは終始誰かがグラスの中身を飲んで
いる音や、貴族流のお上品な世間話に花を咲かせている声が聞こえてきた。海王という言葉に気を
引かれたが何かあるのだろうか。

音楽が変わると今度は女性たちが輪を造り踊り始めて、中心にはシーラ王国のカーロラ王女が
おつとりと優しそうな瞳をした男性の手をとり跳ねるように回りだす。

あれがカーロラ王女が好きになったという臣下の男性だろう。とてもお似合いである。どうか末

長く幸せに暮らしてほしいと、心の中で花束を贈る。

湿った木の手すりを腰を低くして伝い歩きながら、ヤヌスはどこだろうと、そもそもいるのか、私と同じく樽部屋にいるのではと考えていると、人の密度が高い場所が目についた。

ゼノン王子がミスリナ王女と腕を組んで、見知らぬ老紳士と談笑している姿があった。

そこには昼間の白髪男性もおり、そばにはデグネア王女もいた。

やはり訛りからするにヴェスタヌの貴族か、あるいは王族だったりするのかもしれない。

遠目が一瞬だけ男性と目が合ったような気がした。

はやく降りたいこの船。

「そっちは駄目」

「うわ！ びっくりしたー……」

ぐい、とまた首根っこを掴まれたので上を向けば、やはりこの男、アルウェス・ロックマンである。というかもう見なくても分かる。気配なく私の首を掴むのは奴くらいだ。

昼間とは装いが違い、白い軍服を身に纏っていた。じゃらじゃらとたくさんくんしやうの勲章が胸元についている。

コイツは私を野良猫か何かだと思ってるんじゃないだろうな。まあこの場においては間違っていないけれども。

「なによりもう、駄目駄目はっかかりじゃない」

「そんなこそ泥みたいに歩いてたら目立つよ」

こそ泥呼ばわりである。

こんな人混みの中よく見つけたな目ざとい奴めと思っていたが、結構目立っていたらしい。こっち、と、ちようどパーティー会場からは死角になる位置に引きずり込まれる。

大量の酒樽さかだるが積まれており、薄汚れた白い布が散乱はらりしていて埃ほこりっぽい。

夜空の明るさだけが届く、ほの暗い場所だった。

陸の夜は草と水の匂いがあるけれど、ここは海風にのる潮しほの香り、雨上がりのようにしっとり、でも冬の夜みたいに冷たくて透明な空気の匂いがある。

すぐそばで楽団が演奏しているはずなのに波の音が心地よく聞こえて、まるでここの空間だけ切り取られたような感覚に陥おちいった。

頭をぶんぶん回し、大きく骨張った手を首から振り落とす。

ぐわんと揺れた視界には私を見下ろす男がいる。

「体調はもう大丈夫？」

「お陰さまで。治癒魔法が効いたみたいね」

ぶすつと下唇を出しながらありがとうと返す。

意識を失う前にかけられたのはロックマンの治癒魔法だった。

魔法にも癖があり、同じ魔法でも暖かさや冷たさ、かかったときに光る色や香り、纏う空気が違う。近しい人間ほどその癖は分かりやすく、昼間に私へかけられた魔法には寒い日に当たる暖かい暖炉だんろのようなぬくもりがあった。

悔しいが治癒魔法としては優秀な心地よさがある。学校の治癒の先生が「彼には治癒の使い手になってほしいくらいだわ」と言っていたのを思い出す。

「三か月くらい会ってなかったけど」

元気にしてた？ と腕を組みながら酒樽に寄りかかったロックマンが言う。その顔にはほんのり笑みが浮かんでいた。

緩く編まれた金色の長い髪が、身体の動きに合わせて肩から滑り落ちる。

海の水面に反射された月の光が、薄く細められた赤い瞳の中で揺れていた。

「ふふん。三か月と十六日よ。それよりヤヌスを探さなきゃ」

行く手を阻むロックマンにあっちへ行けと背中を向けて手をヒラヒラさせる。

しかしすぐにハッと思いついた。

私よりはロックマンのほうがヤヌスのいる場所に心当たりがあるのでは。

「違うよ、十七日」

は？ 十七日？ んな馬鹿な、とヤヌスの居場所を聞こうとしたのに引っ込んでいた対抗心が剥き出しになった瞬間、右手を掴まれて後ろに引き寄せられた。

よろけてロックマンの胸に背中を預ける形になり、二人して倒れ込む。不覚だが私の体当たりごときで倒れる男じゃないのに、そういえば私はロックマンを押し倒すことが多い気がするのだけどそんなに軟弱なのかコイツ。

踏ん張ればいいのに何でだろう、もしかして私めちやくちゃ重いのかなとか思いつつ足に力を入

れて急いで立ち上がろうとすると、後ろから腹の辺りに手をまわされる。

「明日からまた数え直しだね」

首元に温かい息遣いを感じた。足のあいだに挟まれたまま、動けなくなる。

セレイナの衣装はお腹が出ているので相手の手のひらの体温がじかに伝わる。少し締め付けがきつくなり、より身体がびったりと後ろに重なると、静かで規則的な心臓の音が背中から響き渡る。

べつに強い力で押さえられているわけじゃなくて、抜け出そうと思えば抜けられるくらいの力だった。

泣きやしないけれど泣くんじゃないかってくらい一気に顔に熱が集まって、耳や首まで、なんなら全身が真っ赤になっているのが自分でも分かる。

思わず下を向くと、私の動きを止めている手が目に入った。

……うん、そうだ、これがいけないんだ。

お腹に当てられた手をどかそうと腕を掴もうとする。

「へ、へー……じゅうしちにち」

しかし気恥ずかしくなつてできなかった。

私は両手で顔を覆った。

ねえちょっと待って見た見た見たよこれ、見たことあるやつこれ。ベンジャミンから借りた小説で見たというか読んだことある、恋人とか夫婦とか今にも付き合いだしそんな男と女がやってたやつ。

こんな生き恥だろう。

心臓が激しく動いて苦し過ぎて、おそらく今日寝る前に思い出してそのまま死ぬ。たぶん心臓に元氣な何者かが住んでるんだと思う。元氣過ぎて心臓突き破ってきて私死ぬんだ。

そもそも私みたいな恋愛のれの字もかすってこなかった人間が急にこんなことされたら脳みそが大爆発するに決まっている。

「ヘルは今日ベラの部屋でそのまま休んでもらうことになったから、休みたくなったら彼女に声を掛けるといい」

「そ、そう」

ただそんな馬鹿丸出しみたいな反応をするわけにはいけないので、心臓の住人を宥めつつ平静を貫き通す。私も氣高い女なので自尊心は人一倍強い。

一方ロックマンは取り澄ましたような涼しい声で、私を腕に囲いながら話し続けた。

「ヤヌスって子は僕の部屋で預かってるから心配しないでいいよ」

「そうなの？ 良かった……ありがとう」

聞こうとしていた居場所がすぐに分かりホッと息をつく。ロックマンならドーランの人間だし安心だ。今回の出張についての話もあるので、後で会わせてもらえるように頼まなくては。

「仕事もあるだろうし、明日には二人がセレイナへ戻れるよう使い魔の許可をとるから」

「使い魔……そっか、勝手に飛べないものね。ありがとう」

それはありがたい。何から何まで世話になり申し訳ない気持ちになる。

……というか淡々と喋ってるけどコイツ平気なんだ。あ、慣れてるのか。女の子好きだし。

そんなんの昔から分かってるけどちよつとモヤモヤする……モヤモヤ？ モヤモヤしてんの私。

いやイライラしてるのかも。……イライラ？ 情緒がわけ分からん。

「なんだかイライラする……」

「え」

お腹にある手がピクリと動く。

私だけこんな死の淵ふちにいるのおかしくないか。

色々と考え込んでいたおかげでさっきまで感じていた恥ずかしさが吹き飛び、腕の中で振り返る。

ロックマンは面食らったのか、ぽかんと瞼まぶたを大きく開けると瞬きを繰り返した。

「なんでそんなにペラペラ喋れるの？ 私なんか心臓の人に殺されそうだってのに」

「殺される……？」

口を半開きにしてしばらくそのまま、こいつは何を言っているんだというような訝いぶかしげな視線を向けられた。心臓の人って誰、と聞かれたので心臓がうるさくてたぶん人が住んでるんだと思うわ云々と説明すれば、ロックマンは馬鹿にするように笑うと鼻を鳴らし、瞼を閉じて人差し指でこめかみを押さえる仕草をとる。

「難しすぎる」

そう一言呟つぶやいた。

私もアホなことを口走っている自覚がないわけではないが、そうしてないと落ち着かない自分

がいる。最近知ったことだが、緊張すると私は早口になるようだ。

手紙で二人でどこに行こうかと言われたときも、これが直接口で話されていたらどうなっていたことかと戦々恐々とした。ちなみにその件は魔物のことなど色々あって現在保留中である。

とはいえこのようなことをされて私も正直どんな反応をしたらいいか分からないためモゴモゴ口ごもっている、お腹にあつたぬくもりが離れて、今度は私の両腕を大きな手が包んだ。

「けっこう好きなんだけど」

顔を寄せられて額が合わさり、ロックマンは伏し目がちにそう言った。

「もうひと押ししないと分からない？」

睫毛の本数が分かるくらい近く、頬には息が当たり、金色の前髪が私の鼻先をくすぐる。とても優しくゆっくりな口調なのに、見たことがないくらい真剣な瞳をしていた。

私はとうとう呼吸の仕方を忘れたらしい。

「あら！　こんなところで逢瀬^{おうせ}なんて、あなたたち大胆ですこと」

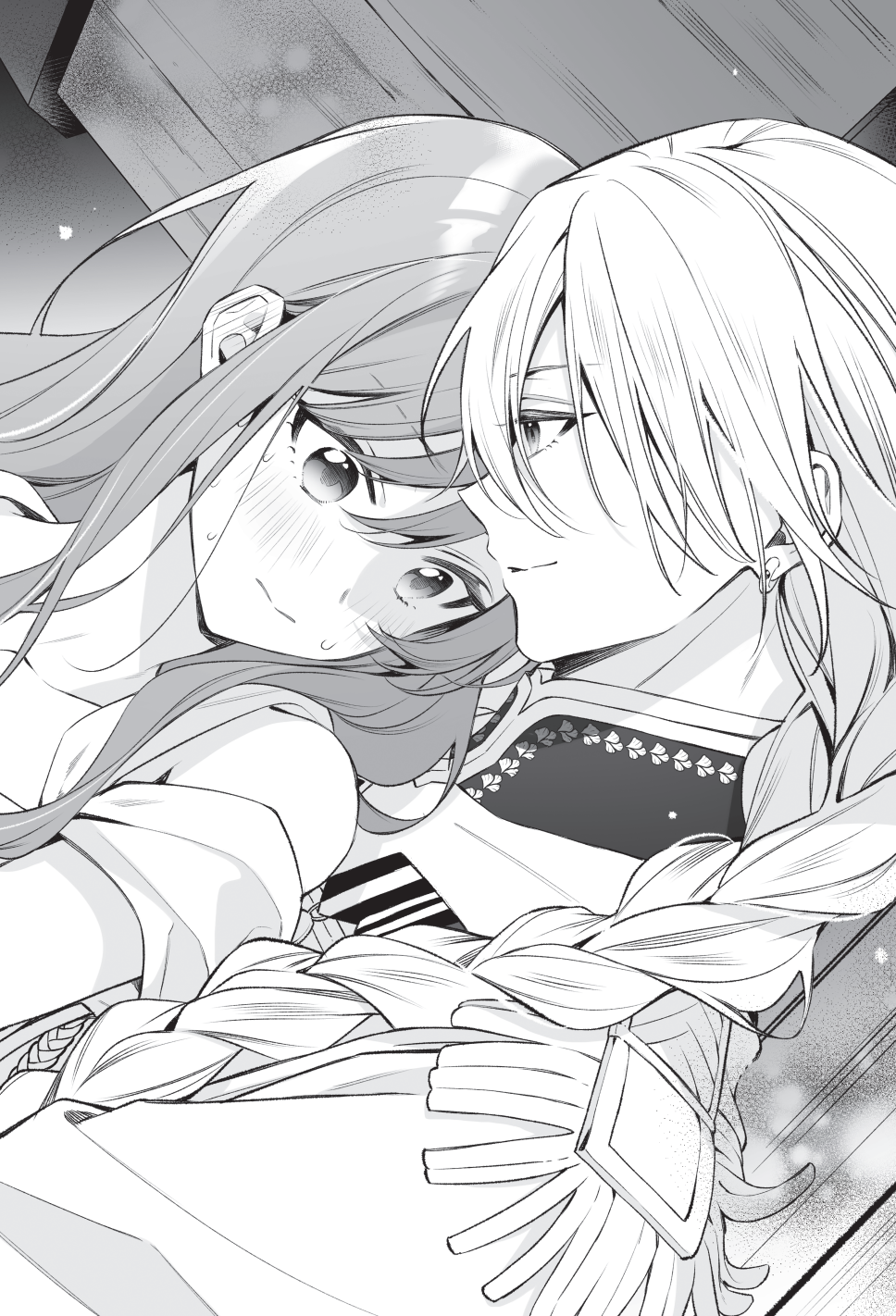
え、と声が出たほうを向くと、酒樽の上から私たちを覗くベラ王女がいた。グラスを片手にニヤニヤしている。

私は渾身の力でロックマンを突き飛ばし、近くにあつた白い布の山へ頭を突っ込んだ。

「お尻が丸見えよ」

かわいなお尻ね」とケタケタ笑う王女は、たぶん酔ってるんだと思う。

立派なお尻ね」と恥ずかしげもなくお尻お尻と連呼する王女様。こんなお姫様見たことない。



「稀であるのか、はたまた私が姫というものについて勝手な幻想を抱いていただけなのか、おおらかな性格であるらしい彼女にこれまた勝手ながら親近感が湧く。品行方正なお姫様も好きだけど、豪快なお姫様も大好きだ。」

「うう」

思わず布の山に隠れてしまった私だが、この姿のほうが恥ずかしいのではないかと思ひ至り頭を引っこ抜こうと膝に力を入れる。

しかし髪の毛が変なところに引っかかり出られなかった。埃が口に入ってゲッホゲホ咳き込む。この際咳の仕方が年々父親に似てきてしまっているのは気のせいだと思うことにする。

「無謀ねえ、いくら瞳を避けたいからって焦り過ぎだわ」

「コックの瞳が危険なのは知ってるだろう？ 僕たちには使えなくても平民のヘルは違う」

「でも本人も苦労しているそうよ。……それで？ 処置はできましたの？」

「……」

処置？ 何の話だ。

うんしうんしよと馬鹿丸出しの体勢で抜け出そうと頑張っていると二人の会話が聞こえてくる。ベラ王女の問いかけに何の言葉も返さないロックマンを不思議に思いながら、あと少しで出られる気配を感じた私は一気に後ろへ体重をかけた。

そしてスポンと勢いよく布から抜け出した私の身体は、ベシヤリと大きな樽に衝突して落ちる。まるで樽が転がるさまを体現したような動きだった。

「それで？　できましたの？」

そんな私の姿を気に留めることなく、ベラ王女は再度念をおすようにもう一度ロックマンへ問いかけていた。

地べたに両手を広げて夜空を仰ぐ体勢になっている私は、後頭部をぶつけて脳みそがグラグラしていたのでなんとなくその格好のままロックマンのほうへ視線を向けた。

前髪が上がっておでこが露になる。

「……大丈夫だよ」

言いつらそうに口を開き、瞼を閉じていた。

「そう！　良かったわー」

ベラ王女は魔法でグラスを宙に浮かせてピョンと樽の上から飛び降りると、身軽な踊り子のように片足で着地し、両手で平衡を保ってふわりと横に一回転した。

「……」

揺れる薄金色の長い髪を前に私は叫びたい。

すうんつごく可憐です。

「貴女、後天の瞳って知ってる？」

ベラ王女は両手を膝につけると、機嫌のいい猫のように細めた目で寝転がった状態にいる私を覗き込んだ。

垂れ下がってきた彼女の柔らかな髪から、白い砂浜の神秘的な暖かい香りが漂う。

「……はっ、知っています！」

王女から話し掛けられた私は慌てて起き上がり、背筋をピンと伸ばし片手を挙げる。

ペストクライブなどと違い、この世界には身体に生まれつき不思議な力が備わっている人間がいるのだが、そのうちの一つに後天の瞳という能力がある。

能力は他にもさまざまあるが、力を持つ人間は世界に数人〜百人いるかないか。

後天の瞳は大陸の西側で生まれたクライブ（未成分児）が原因と言われており、発現は子孫に稀にあるかどうかである。

操権の唇、心相の耳、宝石の涙、魅了の香り、先天の瞳と色々あるが、身体に発現し発見されている人数はほんのわずかで、記述は世界各地に残ってはいるが本当にあるのか？ というくらいのものであった。

その中でも後天の瞳は、相手の瞳を見ることがその人間の真実を覗くことができる能力を持つ瞳のことをいう。

真実とはつまり、嘘をついているかついていないかが分かる。人数は乏しくほぼいないに近いため、詳しい研究はなされておらず所有者がどこまで見破れるのかまでは分かっていない。

しかし同時に、後天の瞳は別名魅了の瞳とも呼ばれていて、能力を最大限に生かすために瞳を合わせれば相手に自分を好意的に思わせる力が付与されていることが少なからず判明している。惚れ薬の効果に近い。

反対に先天の瞳は自分の嘘を相手に信じ込ませることができる。しかしその反動で所有者の体調

は一時的に著しく悪くなる。^{いちじる}

死をもたらすほどではないらしいが、程度は分からない。

これらの能力は世間から神により与えられた力だとか言われているが、はつきり言ってそれほど能力に魅力を感じないし、むしろ与えられた本人にとつては厄介なのではという印象しか抱かなかったのだ、こんなの与えてどうするんだろと十歳の頃大陸史を読んで思ったことがある。

「あの白髪の男はヴェスタヌの第一王子で、後天の瞳の持ち主なの」

白髪の人は、なんと王子様だった。

高位貴族に違いないとは思っていたが、まさか次期国王となる人に毛布をもらっていたなんて。

しかも後天の瞳を持つということは、母方が西大陸の人なのだろうか。

ヴェスタヌは能力が高ければ貴族平民関係なく結婚ができる。

そう考えるとそんな国の王族に特殊な力を持った一族の末裔^{まつえい}が嫁いできてもなんらおかしくはない。

歴史を見ると能力者本人が能力を利用するというより、周りにいる人間が恩恵^{あずか}に与ろうと能力者を利用する場合のほうが多かったらしいので、本人もそんな立場にしながら能力を持つなど、それこそ苦悩や苦労は普通の人間には計り知れない。

「では、つまり……？」

「つまり、平民である貴女に遠巻きにちよっかい出そうとしていたから、アルウェスが気を逸らしたのよ」

ちよっかいつて、話の流れからするに後天の瞳の能力のことかと理解するが、気を逸らすって何のことだろう。

「……要するに？」

「他の異性に少しでも魅かれれば魅了を解くことができるから、慌てて応急措置をしたってこゝと！」

ベラ王女は人差し指を立てて、パチン、とかわいく瞼を閉じた。

ふーんなるほど、つまり後天の瞳に魅了されそうになっていたかもしれないから、わざと顔を近づけたり変なコト言ったり変なコトをしたと。

つまりそういうことだと。ふーん。

「応急、ね」

ジロリとロックマンを見る。

当の本人は袖口から葉巻を取り出してプカプカ吸っていた。んだコイツ腹立つ。

額に青筋が浮かんだ私はたぶん悪くない。

言えはいいいじゃないのまどろっこしい！ と叫んで訴えたが、奴はどこ吹く風で夜空を見上げた。

「だって言ったら風情がないじゃないか」

切なげな顔をして自分は何も悪いことはしていないと言わんばかりの態度に、さっきまで私の心臓を突き破ろうとしていた住人が今度は私の血管を千切ろうとしている。

風情？ コイツにとっての風情って何。風情にしてはやりすぎなように思うんだけど風情の程度